

空 襲

伊藤 博子

昭和二十年、私は女学校二年生でした。学校は軍部に接收され勤労働員でガラ空きになった釧中へ通っていました。

七月十四日朝突如鳴り出したサイレンに誰もが驚きました。警戒警報は出ていなかったのです。雲の上の爆音に気づいた人も敵機とは思ってもみなかったのです。「空襲！退避！」警防団の人の叫びに慌てて裏庭の防空壕へ入りました。口を閉じた穴の中は真っ暗で母と妹の顔もわかりません。「パチパチパチ、キーン」外界が騒々しくなりドーンという度に壕が揺れるので恐ろしく親子三人がしがみついていた。

敵機が去り、警備班だった私は尚も警戒警報が続く中を学校へ急ぎました。後から考えると、非常事態とはいえ軍の管轄になったところへ敢えていく必要はなかったのですが、一億総決戦と思いつ込んでいた時代でした。校庭には土嚢が積まれていました。着く早々再びの敵機来襲で、先生に従い集まった仲間と共に非難しました。横穴式の壕は現在の教育大下の斜面にありました。攻勢は激しく、立て続けの炸裂音の間を金属性の爆音が貫き、校庭では応戦の機関銃音が弾け硝煙の臭いが鼻をつきます。入口から撃たれないように鉤の手になった奥で一塊りになり防空頭巾の上から耳を押さえていました。静かになって恐る恐る出てみると、川向こうは煙に包まれ近くにあった無人の壕が潰れていました。大音響に壕が大きく揺さぶられたときにやられたのでしょうか。もし此処に入っていたらと「ゾッ」としました。

波状攻撃の合間に私達は家に戻りました。荷物疎開の事で鶴居へ行っていた父が帰っていました。鳥取の製紙工場付近で猛撃に直面し、溝の中で伏せた父は急降下して来る機影と機銃の恐ろしさに思わず傘を広げてしまい、「バカヤロー」と誰かに怒鳴られたそうです。顔面蒼白、白長靴には泥水が入ったままでした。夜も父は一步も壕を出ようとはしませんでした。

今の栄町公園一帯は被害が最も大きく、次々と投下される爆弾に家は焼かれ多くの尊い命が奪われました。滝のような音を立て炎は猛り狂ったといいます。逃げ後れ壕の中で折り重なるように亡くなられた御家族も少なくありません。二日に亘る空爆の跡はいつまでも燻り続けました。末広町に住んでいた叔母は乳飲み子を背負い、たった一つのお襦袢の包みさえ途中で投げ出し、無我夢中人の後について逃げたと後で聞きました。私の家は一年前に栄町から移っていて危うく難を免れましたが、同地区の釧中の横に爆弾が落ち一人亡くなりました。艦砲射撃も予想され、「どうせ死ぬんだから」と大切に残しておいた食糧を食べ、畳の上も靴のまま歩きました。

終戦の一か月前でした。五十年経った今でもブラウン管に映る諸国の紛争を目にする度に当時の記憶の世界にひき戻され、平和を願わずにはられません。戦争はもう真っ平です。夜霧のロマン漂うこの北の港町にも悪夢の如き痛恨の事実があったことを忘れてはならないと思います。お亡くなりになられた方々の御冥福をお祈り申し上げます。